蘭亭序

付属DVD「蘭亭序」

付属ワークシート P.11～12

教材研究

作品のしくみ

概要

王羲之晩年の代表作にして、書道史上の最高傑作とされる。行書学習においては、必ず押さえるべき古典として位置づけられている。二十八行、三百二十四字。原跡は存在せず、いくつかの優れた複製本によって、書法の妙を学ぶことしかできない。また、原跡の真偽や複製本の伝来などを巡っては、あらゆる議論があり、未だ明らかにされていないことも多い。

作品の由来と内容

東晋の永和九年（三五三）三月三日、右軍將軍・会稽内史であった王羲之の呼びかけで、会稽山陰の蘭亭（現在の浙江省紹興県）に、謝安、謝万、孫綽ら四十一人の名士が招かれた。彼らは祓禊（みそぎ）の礼を行った後、曲水の宴という詩会を催した。この席で得られた羲之以下二十七人の詩が詩集にまとめられ、序文を王羲之が書いた。その草稿が「蘭亭序」の原跡とされている。

本文は、まず、蘭亭に諸賢が集い、おおいに交歓する華やいださまを記す。続いて、王羲之は自らの死生観について打ち明ける。達観して生死を一元化することなど自分には到底できないと、移ろいゆく生への哀感を訴え、後世への思いを述べて締めくくっている。既に官界を引退し、自適の生活に転じていた王羲之であったが、内面の不安と向き合う日常であったことが察せられる。

「蘭亭序」の原跡は流転を経て、唐代には民間にあったとされ、王羲之の崇拜者であった初唐の太宗が苦心の末にこれを入手し、その複製からは道教への傾倒を強めるなど内面にも変化が生じるようになってきた。永和十一年（三五五）には、自ら会稽内史を辞し、官界を去る。五十三歳であった。以後、より道家的な生活を志向し、会稽の山水を愛でながら服食（仙薬を服用すること）養生し、名士、道家と交わり自適の暮らしを送った。

その書は在世時から評価が高く、本人も自負を抱いていたようである。ただ、誰に師承したのか、何を習ったかについては判然としない。一説には、衛瓘（衛夫人）や王曠に師事したというが、根拠はない。また、自身が書について言及した尺牘も非常に少なく、能書としての人生を知るには材料が乏しい。ただ、「書聖」として傑出した存在となるのは後世のことであり、同時代においては代表的能書の一人という位置づけだったと考えるのが妥当なようだ。

王羲之のほかの作品

王羲之の真跡は今日伝わっていないが、伝世の複製類は尺牘類を含め膨大な数にのぼる。ここでは、行書を中心に数点のみ紹介する。

- 「集王聖教序」……唐の咸亨三年（六七二）成立。集王碑とは、王羲之の筆跡から文字を集めて銘文を作り、碑石に刻したもので、本作が最初とされる。文字が不ぞろいではあるが、王羲之の墨跡を根拠とするため、格別の価値がある。玄奘三蔵がインドから多くの仏典を持ち帰り、それらを漢訳した功績を称えて、長安の興福寺内に立てられた。原石は西安碑林博物館に現存する。なお、興福寺断碑（唐・七二一年頃）も行書による集王碑の逸品として知られる。
- 「姨母帖」……王羲之の早年の作とされる尺牘（手紙）。唐の則天武后のときに、王氏一族の書を集めて編集された『万岁通天進帖』の帖首に収められる。墨跡本の模本が遼寧省博物館に伝わる。
- 「奉橘帖」……王羲之の尺牘、「平安帖」「何如帖」「奉橘帖」の三通を一紙に撮模（双鉤填墨）したものの。三帖ともに行書を中心とする。台北国立故宫博物院蔵。

製の制作に取り組んだ。やがて、その死去に伴い、原跡は昭陵に随葬されたと伝えられている（詳細は本書48・49ページ「受け継がれてきた蘭亭序」参照）。今日の「蘭亭序」の学習は、この唐代の複製を基本に行われている。

筆者のしくみ

概要

王羲之は、東晋の名門・琅邪王氏の出身で、不安定な政治情勢の中、官途を歩んだ。生卒は諸説あるが、東晋の大安二年（三〇三）～升平五年（三六一）説が比較的支持されている。字は逸少、官名によって王右軍ともよばれる。琅邪臨沂（山東省）の人。王曠の子。東晋建国の際、主導的役割を果たした王導や王敦は父の従兄弟に当たる。

王羲之は、幼少の頃から一門の逸材として将来を嘱望され、二十代の半ばから仕官した。咸和九年（三三四）に征西將軍・庾亮に迎えられ、武昌（湖北省）の參軍、転じて長史となる。しかし、数年のうち頼りとする有力者を失い、江州（江西・湖北省）刺史としての任期を終えると、官を離れて都に戻った。やがて旧知の殷浩に勧められて護軍將軍の勅命を受け、ついで宣城郡（安徽省）への着任を申し出たが受け入れられず、右軍將軍の位で会稽（浙江省）内史となった。以後、徳政によってこの地でおおいに功績をあげるが、王羲之自身は、武人として中原回復の任に就くことへの思いが強く、北方情勢への関心が衰えることはなかった。もともと官吏としての王羲之は「骨鯁」とも評され、妥協を許さない一本気な面が勝っていたが、会稽に赴任して

- 「喪乱帖」……王羲之晩年のものとされる尺牘。卓越した書法美、高度な撮模技術、保存状況のよさにおいて、王羲之の墨跡本中の首座を占める。宮内庁三の丸尚蔵館蔵。
- ※そのほか、『淳化閣帖』をはじめとする集帖に、行書の尺牘が多数収められている。

指導のポイント

指導上の留意点

- 導入期の生徒は、行書を単に楷書の速書きと捉えていることが多い。しかし王羲之の書法は、一貫した筆脈の中、微妙な点画の均衡で各字が成り立っており、楷書とは別の原理が貫かれている。特徴的な文字を例に挙げながら、この点を十分に理解できるように工夫したい。
- 「蘭亭序」の臨書・鑑賞を通して、前項で確認した行書の特徴を体得させたい。点画の連続、点画の省略、筆順の変化などが、筆脈の中、結果として生じてくるものであることを踏まえて指導したい。
- 「蘭亭序」は、王羲之の尺牘類と比べ、変化が抑制されている。教科書掲載の全図（教科書37～41ページ）を活用し、揮毫の流れに沿って刻々と変化する自在の書法を、広い視野で確認させたい。
- 教科書36ページの「天明氣（氣）清」を臨書する前に、気づいたことを発表させるとよい。「天」の第三画目の起筆の位置、「朗」の偏の大きさ、「氣（氣）」の「米」部の左方への広がり、「清」の旁のバランス（上が大きく中心が右にある点）など、生徒が中学校までに学習してきた常識とは、大きく異なる点がある。「蘭亭序」の中で、同様の書法で書かれている部分を指摘させるなど、応用的な指導も工夫したい。